

第5回JCLAワークショップ「日本語フレームネット」

評価を伴う伝達動詞:「ほめる」・「しかる」・「おこる」の分析

鈴木亮子 (慶應義塾大学)

藤井(2005 本論文集)に述べられているように、伝達行動に関する動詞の中には、機能用法的に特化したものがある。その一つの例として「評価」を伴う動詞が挙げられる。他者の行った行為や行為の結果に対する話し手の評価を言語化する、という意味内容の動詞である。ここでは、「ほめる」「しかる」「おこる」という動詞に関してFNでの分析を出発点として行った観察について報告する。具体的にはFNで日本語の「ほめる」「しかる」「おこる」に近いとされる動詞が、どのように分析されているのかを基にして、それらの動詞のフレームとフレーム要素が日本語に適用できるかどうか、という点から考える。

1. ほめる

日本語では、「ほめる」に関しては「自分と同等、あるいは目下のものをすぐれていると私的に評価し、それを言葉であらわす」という定義がある(柴田他編 2002)。「ほめる」に一番近い動詞として和英辞典などで典型的に挙げられる "praise" という動詞を手がかりにFNで調べると、Judgement_communication というフレームに分類されている。動詞 "praise" が取るフレーム要素を見ると、主なものとしては、Communicator(伝達者)、Evaluee(被評価者)、そしてReason(評価の理由)が挙げられている。たとえば "Thatcher praised Gorbachev for his role in the democratization of eastern Europe." という文が、アノテーションの結果 Communicator+Target+Evaluee+Reason と分析されている。

ここでは "praise" のフレーム要素を基に「ほめる」の検索結果を分析し、FNでの "praise" のフレーム要素との対比を試みる。まずCommunicatorとEvalueeというフレーム要素は英語と共通に見られる。例えばCommunicator + Evaluee + Targetというパターンがある(例:テリー伊藤さんは、新世代の競技への取り組み方をほめる)。FNにならって、Evaluee、つまり評価の対象が人である場合(例:上田監督がニールをほめた)だけでなく、ある人の、よい評価に値する側面を取り上げる場合(「新世代の競技への取り組み方」)もEvalueeというフレーム要素が具現化したものと考えられる。

興味深いのは、「ほめる」という日本語動詞に関して、CommunicatorとEvalueeというフレーム要素の記述においては情報を付加する必要がある、ということである。つまりCommunicatorは目上(か同等)、Evalueeは目下(か同等)という「社会的関係」が二者間に明確に存在する。Communicatorというフレーム要素にあたる名詞は先生、顧客、先輩、母、監督などで、対するEvalueeは生徒、行員、後輩、子供、選手というように、実例が如実にそれを表わしている。

英語の "praise" ではほめる・ほめられるのに目上、目下という事実は関係ない(Michael Ainge氏, p.c.)。さらに日本語の「自分で自分をほめる」という例に見られるように、Evalueeとして話し手自身を指示することはない(Helen Ballhatchet氏, p.c.)。つまり複数の言語間での比較作業によって、Communicator、Evalueeの記述に、話し手自身を指示できるかどうか、社会的関係が関連するかどうかというような情報を加えることが可能になる。

もう一点、英語と異なるという観点から興味深いのは、日本語におけるMessageというフレーム要素の存在である。日本語では、「発言」を引用することで相手の行った行為へのよい評価の根拠や、具体的な評価内容を表す。Messageというフレーム要素がこれにあたる。例えば[Communicator竹村吉昭 コーチは][Message「勇気があった」と][Evaluee中村を][<target>ほめた</target>]という文に見られるように、ほめる根拠が引用されたコーチの発言の中に含まれている。

FNでも具体的な発言内容(引用記号でくられた引用部分など)の扱いには、Messageというフレーム要素が設定されているが、Messageが動詞の重要なフレーム要素として分析されているのは、Statementフレーム(藤井 2005 本論文集)の他、Questioning(質問)やRequest(要求)フレームであり、Judgement_communicationフレームではMessageは動詞に必要なフレーム要素として位置付けられてはいない。英語動詞の"praise"を含む文中には、Reason(評価の理由)という要素は存在するが、Messageという要素は存在せず、逆に日本語の「ほめる」では、Reasonというフレーム要素とは別に、Messageというフレーム要素をたてて分析した方が良い例が認められる。

また、Messageの中身は、ほめる根拠だけでなく、評価の内容(つまりよい評価の形容詞)を含む場合も多い。例としては[Communicator近くにいた釣り人から][Evaluee DNI(私は)][Message「あんたは上手だ」と][<target>ほめられた</target>]という文がある。(注)

2. 「しかる」

辞典には「目下のものが、悪い事・間違っただ目下の者を強く注意する、あるいは目下の者に対して、その行為を、強く注意する」(小泉他編 1989(2000))とある。「しかる」に関しては、最も典型的に訳語として挙げられる英語の"scold"のFNにおける分析を基に日本語のデータを見る。FNでは、"scold"は"praise"とは異なるフレームに分類されている。Judgement_communicationフレームではなく、Judgement_direct_addressというフレームである。「しかる」は、単に相手の行為に対してマイナスの評価を口頭で伝えるだけでなく、相手の行為に対して強く注意したり、禁止したり是正を求めるとまで意味内容に含むため、英語に見られるフレームの違いが、日本語でも適用できると考える。更に、日本語において、「ほめる」場合はEvalueeはCommunicatorの目の前にいなくてもいいのであるが、「しかる」場合は、Communicatorの目の前にその評価を伝える相手がいなくてはならない(岩田彩志氏, p.c.)。その意味でも、FNのAddresseeは日本語の「しかる」の分析にも適用でき、「scold」のフレーム要素設定を出発点として分析を進めることが可能と考えている。

FNにおける"scold"の分析では、"He scolded me for leaving the flat."という例(Communicator+Target+Addressee+Reason)に見られるように、Communicator(伝達者)とAddressee(受け手)とReason(理由)というフレーム要素が設定されている。「ほめる」の時と同様、「scold」と日本語で対応する「しかる」の間には、共通しているフレーム要素と、異なるフレーム要素がある。共通しているのは、CommunicatorとAddresseeである。「ほめる」と同様、「しかる」も、CommunicatorとAddressee に関して、目上と目下という「社会的関係」を記述に含める必要がある。Communicatorの例としては、読者、教師、姑、家康、親などがあり、Addresseeの例としては、記者、学生、嫁、家臣、子供などが見つかった。ちなみに、英語の"scold"では、日本語と同様、目上を叱るということはない(Michael Ainge氏, p.c.)。また、自分で自分を"scold"することが可能(Helen Ballhatchet氏, p.c.)という点で、「praise」の場合とはやや異なる様相を呈している。

次に日本語と英語でのフレーム要素の違いを見ると、英語ではReason(叱る理由)という要素が重要だが、日本語ではMessage、つまり「何と云って」しかったのかという発言の引用が目立っている。コーパスの用例を見ると[Addressee DNI(松尾芭蕉は)][Communicator師に][Message「とんぼを殺しては俳句とは言えん」と][<target>叱られて</target>]のように、Messageの内容が叱る理由を表現している場合と、[Communicator DNI(母親に)][Addressee DNI(明美は)][Message「この子ったら電話ぐらいしなさい」と][<target>叱られて</target>]のように、相手の行為に対しての是正要求などを表現している場合がある。Messageと一口に言っても、精密な下位分類が必要である。

3. おこる

「おこる」というのは、辞書には「気に入らない事があって、我慢できない気持ちを外にあらわす」(柴田他 2002 「嫌悪」の項)、または「相手の不都合な言動に対して腹を立てて、相手にその気持ちをぶつける」(柴田他 2002 「叱責・脅迫」の項)とある。

英語では日本語の「おこる」に対応するのは、一つの動詞ではなく、“be angry”, “get mad”, “be offended”などのような、怒りの状態になるという形容詞(または名詞)を軸にした表現である。これらの表現は、Emotion_directed フレームに分類されており、フレーム要素としては、Experiencer(経験者)とStimulus(刺激)などが挙げられている。では、実際に日本語の「おこる」に関係するフレーム要素を、FNを参考にして検討すると、共通のフレーム要素が適用できるようである(例: [Experiencerテレビ解説者は][Stimulus誤審に][<target>怒っていた</target>]) (cf. 小原他 2005b)。この用例のように怒る相手が目の前にいなくても、また人物に限らず組織や事柄に対しても、怒りの感情が触発される。

もう一つ興味深いパターンは、「ほめる」「しかる」同様、Messageというフレーム要素を含む場合である。例えば、[Experiencerジェームズさんは][Stimulus DNI(1985年に結ばれた英国・アイルランド協定で北アイルランドの事について発言する地位を得たアイルランド政府に)][Message「意見を言うだけで実行を保証する責任体制がなかった」と][<target>怒る</target>]という文が挙げられる。実際には、Stimulusは前のディスコースで既に言及されこの文ではDNIになっているが、政府に対するジェームズさんの評価・反応が引用されている部分がMessageとして表現されている。「怒る」の用例に含まれるMessage(感情の言葉による発露)の内容を見ると、マイナスの評価を表す形容詞を含むものや、否定の表現を含むものが見られる。

これから更に分析を要する問題の一つは「しかる」と「おこる」の比較・対照である。例えば「ドイツのミュンヘンで苦虫をかみつぶしたような顔のセルジュ・チェリビダッケ(ミュンヘン・フィル芸術監督、故人)になりきった時は、『われらのチェリビダッケはそんな変な顔じゃない!』と怒られた」という文に見られるように、「しかる」と「おこる」を両方使える例が存在する。コーパスでは一人称(私)が誰かに「おこられた」という受動文が多く見られるが、上のような例に対して「しかる」と同じフレームを設定している。つまり「おこる」という動詞に関して、異なる二つのフレーム(Emotion_directedフレームと、Judgement_direct_addressフレーム)に属する用法があると考え、別々のLexical Unitとして扱いながら目下分析を更に進めている。(cf. 小原他 2005b)

4. まとめ

ここでは「ほめる」「しかる」「おこる」という、評価をともなう伝達表現の動詞を扱い、フレーム要素の違いという観点から、英語・日本語の違いについて考察した。

(1) FNでのフレーム・フレーム要素の設定は、対象とする動詞において、日本語に充分適用可能である。

(2) 「ほめる」と「しかる」については、ほめる・しかる側 (Communicator) とほめられる・しかられる側 (Evaluatee/Addressee) の間に存在する、目上・目下という社会的関係の情報を、フレーム要素の記述に含めることが必要である。

(3) Messageというフレーム要素について言及した。3つの動詞は広い意味での伝達行動の動詞であるが、「何と言って」ほめたか、しかったか、おこったかという発言内容のフレーム要素としての位置付けが、日本語と英語で異なる。Messageは日本語の用例ではよく見受けられるが、FNにおける対応動詞・フレームの分析では、該当フレームにおける核となるフレーム要素ではない。

このケーススタディは「毎日新聞」をデータとして使用しており、誰が何を言ったかという発言そのものを引用することが情報の価値を高めるような記事部分の文が多く含まれている。今後、より広範囲のジャンルからなるコーパスを基に、Judgement_communication, Judgement_direct_address, Emotion_directedフレームにおけるMessageというフレーム要素の日本語における位置づけを考えていく。

(注)

DNI (Definite Null Instantiation: 限定指示的ゼロ表示) については小原他 (2005a 本論文集), 藤井 (2005 本論文集) を参照のこと。

参考文献

小原 京子, 石崎 俊, 大堀 壽夫, 斎藤 博昭, 鈴木 亮子, 藤井 聖子. 2005a. 日本語フレームネット概要. 日本認知言語学会論文集第5巻 JCLA 5.

小原 京子, 大堀 壽夫, 鈴木 亮子, 藤井 聖子, 斎藤 博昭, 石崎 俊. 2005b. 日本語フレームネット: 意味タグ付きコーパスの試み. 言語処理学会第11回年次大会論文集.

小泉保, 船城道雄, 本田晶治, 仁田義雄, 塚本秀樹 (編). 1989 (2000). 日本語基本動詞用法辞典. 東京, 大修館書店.

柴田武, 山田進 (編). 2002. 類語大辞典. 東京, 講談社.

藤井聖子. 2005. 日本語フレームネットにおける「伝達」領域での分析. 日本認知言語学会論文集第5巻 JCLA 5.